東京

四弦　悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東京

【Ｎコード】
Ｎ４１２９Ａ

【作者名】
四弦　悠

【あらすじ】
僕はこの街にきてから、変わってしまったのだろうか。彼女がいないこと、話せないことがお互いをどこまで変わらせたのだろうか

第1部　～Aメロ～（前書き）

くるりの「東京」を聞いて話を考えてみました

第1部　～Aメロ～

「この世界はどんなにその場所がここから遠くたって、自分と人種や性別が違うからといっても、この空ひとつでつながっているんだよ？だから、遠くの事件とか祝い事を他人事とか思わないほうが、私はいいと思うけどね。」

生真面目と言ってもいいようなことをいっても様になっていて、それが苦痛ではなくむしろ心よい響きで胸をうつ、そんな彼女が言った言葉だった。

それを忘れずに持ってきたつもりなのに、ここにきてからなんだかそんな言葉がうそに思えてしまっていた。

東京。あこがれをもってでてきたつもりだったのに、空を見上げてみると彼女の言葉がうそのように思えて仕方がなかった。僕は少なくとも週に2、3回は空を見上げて、なんとかこの空が僕の田舎に、言ってしまえば、その彼女がいるところとつながっていると、証明するためのなにかを探し続けているのだけれど、どこにも見つからないで、あきらめてしまっている。

ねえ、由紀。君はこの空を見上げたとしても同じことが言えるのかな？

「はいはい、そこの健全な青年よ、今日は都合があいているだろう？」

そんな声で僕は一気に空を駆ける気分から地面へ降り立ってきた。

「こんな東京の大学のど真ん中でまたまた、上をぼーっとみつめて

いるやつが、今日は忙しいわけないですよね？」　とまあごもっともなことを言いながら、友達の大紀が近づいてきた。
「こらこら、亮次君、最近付き合いが悪いのではないか？クラスの飲みもあんまりこなければ、この僕の誘いを断っているぞ最近！まったくどうなっているのかね、君は。」
　そういわれて、僕は思わず苦笑いしてしまう。確かにここ最近、なにかと理由をつけて彼の誘いを断っていたのは事実だった。
「いや、お金なかったしバイトとかもあったからさ。」
「そういいつつ、ＣＤやら本やらをたくさん買い込んでいるのは知っているんだからね。」
　なんでそんなこともでわかっているんだ、と思ってしまうようなことを言われてしまったので
「わかったよ、今日はいいよ」と反射的に答えてしまった。
「よーし、じゃあ俺の家で後でな！」とにんまり笑って颯爽と去ってしまった。
　あー、やられたなと思いながら、また空を見上げていた。
夕日に染まった空のどこにも、どこかにつながるようなものが見えなかった。

　結局飲みの誘いを断りきれず学校後、彼のアパートに寄ってみると彼のにんまりした笑顔と、しこたま買い込んだお酒が僕を迎えてくれた。
「亮次はねー、ずるい！！ずるいよ！！」
　またわけがわからないこと言って、大紀が僕に絡んできた。助かるすべもなく、ただただ苦笑いで彼の言うことを聞いてみたりする。
「お前はそうやって、自分のことはあんまり話さないで俺にばっかり話をさせてさー。亮次はずるいよ！」
「いや、それは大紀が勝手に話しているだけでしょうが。」と思わず突っ込んでしまう。
「まぁ、確かにな。」そう言ってお互いにグラスを空ける。

大紀は本当によく話してくれた。自分が北のほうからきたこと、家族、将来、そして好きだった子のことまで、熱く時には丁寧に話してくれた。僕はそれを黙って聞いているか時より笑いながら、そして自分のことを考えながら彼の話を聞いたりしていた。今、お互いのグラスにもう一回お酒を注ぎ、飲んでいるとふと彼がまじめな顔をして

「まぁ別に話したくないならいいけどな。こういうのは無理やり聞いたりしたところで、おもしろくもなんともないし、そんなの邪道にしか思えないからな。」

と、妙なことを言ってくる。大紀のことを信頼しているのはこんなところからなのだ。

ありがとう、僕がそうつぶやくと大紀は急に照れだし、それをごまかすようにお酒を飲みながら

「さて、今日は夜も長いからまだまだこれからですよ!!さあ亮次君、一緒にがんばりましょう!!」

と笑顔で話し始めた。　買った酒を全部空ける気か・・・　まだまだ夜は長そうだ。

結局、彼が酔いつぶれてしまったので一通り片付けた僕は彼のアパートを出て、自分の部屋に帰ることにした。（少し酔っ払いの抵抗はあったけどね）僕はＨＤウォークマンを聞きながら駅に向かうことにした。

大紀は本当にいい男だ。自分が東京にきてから一番よかったことといったら彼と出会えたことだった。

彼はこんなとっつきにくい僕に明るく接してくれた。そのことが東京に出てから困っていた僕の生活を明るくしてくれた。

それでも、僕は大紀に何も話せないでいた。海のある南のほうから来たこと、自分の家族のことや好きな音楽のことを話せても。

田舎での生活、そして由紀のことは何も言えないでいた。

それは例え大紀であっても、自分の過去とある線を引いておきた

かったり、由紀のことを言われるのがつらいのかもしれない。由紀がひどい人のわけではない。ただ自分の思い出に彼を迎え入れる勇気がないだけなんだ。

曲に思いを飛ばしていると、駅についていた。ベンチに座ろうと思ったが、酔っていたせいで勢いよくベンチにこけてしまった。思ったより大きな音が出てしまし、ホームにいたまばらな客が驚いて僕のほうを見つめていた。僕はそのまますごく酔ったふりをして寝ていた。

ねえ、由紀はこんな僕を恥ずかしいと思う？あんなに酔っても自分のことをまったく話せない僕のことを恥ずかしいとか、恥ずかしいことがないように思いますか？

こうしてホームにいると、また由紀のことが懐かしくなってしまった。

田舎の駅で、寂しそうに手を振っていた彼女が・・・

2〜Bメロ〜

窓際で肘をかけて、外をぼーっと眺めている。ただそれだけのことなのに、それがすごく様になっていた。それが由紀だった。

僕といえば、そんな彼女を見かけたときには教室の端っこの、しかも窓際で外を眺めるのが日課の高校生だった。同じことをしているはずなのに、僕はやる気がないように見られ、由紀は女優のように見える。

そんなことから、僕は由紀に興味を持ち始めた。恋と呼ぶには何かが足りない感情だったのだが、それでも毎日目的を持てずに苛立ちを抱えながらだらだら生きていた時に、少しの歯車になってくれた。

由紀は友達が少ないわけではないのだが、なぜか一人でいることが多い子だった。だから、学校で話しかけようと思ったらいつでも話しかけられたはずなのに、僕にはそれができなかった。話しかけることがなんだか気恥ずかしかったり、話しかけてはいけないのではないかと思えて仕方ない雰囲気だった。

そんな日が劇的に変わったのは、とある日曜日のことだった。

日曜日は当然のように学校がないわけで、僕も由紀も部活も委員会なども何もしていなかったので当然のように見かけることもなかった。

だから、日曜日は退屈と苛立ちを紛らわすために、本屋やＣＤ屋によってはおもしろいものを見つけようとやっきになっていた。そんないつもと変わらないはずの日曜日だった。

おもしろい本を見つけた僕は、家にすぐ帰る気にはなれずにどこかで休憩しながら本を読もうと思った。一応駅前にはチェーン店のファーストフードがあったのだが、そんなところで本を読む気になれなかったのでうろうろ探し回っていると小さな喫茶店を見つけた。

おもしろそう。そう思って僕は勇気を振り絞って中に入った。
店内にはまたおもしろそうなレコードやらポスターがたくさんあって僕はしばらくそれらを見つめていた。
本に加えてなんておもしろい店まで発見したんだ！　僕は心の中でガッツポーズをしていた。
「いらっしゃいませ」
突然後ろから声をかけられて、思わずビクっとなり振り向いてみる。
神様ってのはいるのかもしれない。そこには由紀が立っていたのだ。
僕は、信じられない事態にただ、由紀を見つめていた。
お一人様？席はどこでも空いてますから。メニューでございます、お決まりになったら呼んでください
そう声をかけられたはずなのだが、僕はとにかくこんがらがって、ただただいわれるままにしていた。
ようやくコーヒーを頼む気になった僕はそこで初めて、客と店員という立場ではあるが、由紀に話しかけてみた。
「すいません、コーヒーください。あのー、ミルクたくさんで」
ブラックって言ったらかっこうがついたのかもしれないが、苦いのがだめな僕はこんなものしかいえなかった。
そこで改めて店内を見回してみると実はカウンターにおじいさんがいて、その人がコーヒーを入れていることや、興味がある本や映画のポスターなどがあることに気がついた。
「おまたせしました。コーヒーでございます。」そういって由紀はコーヒーを持ってきた。
ごゆっくり、といい終わる前に僕は勇気を持って話しかけた。
「あのさ。」　はい？って感じで振り向く由紀。
「中谷さん、だよね？」　僕はおそるおそる聞いてみた。
「そうですけど。」
「よかったー。間違えてたらどーしよーかと思った。俺、同じク

ラスの森岡だよ。わかるかな？」
ちょっとした自己紹介と、質問を加えた挨拶。
「あー、はいはい、どこかで見たことがあるななんて思ってたら。ごめんね、私クラスとかあんまり一生懸命じゃないから。でも森岡君ならなんとなく知ってたよ。」
「ん、どーして？」　どきどきしてきた。
「だって、いつも外見てぼーっとしてるし、本とか持っているし。」
もっと積極的人間になっているべきだったのかな？という風な印象だったみたい。僕は少し落ち込んだがこの機会を逃さないために次の質問をしてみた。
「ここで、バイトしているの？おもしろいよね。」
「バイトっていうか、ここ私のおじいちゃんの店だから。」つまりはあのカウンターにいたおじいさんは、由紀の祖父だったらしい。また話しかけようと思った僕に、ごゆっくりとシャットアウトの声をかけて由紀はいってしまった。
正直そこからコーヒーの味も、読んだ本の内容も覚えていない。由紀のことを目で追って、すっと考えていた。店を出るときに僕は意を決して彼女に話しかけた。
「あのさー・・・」　ん？と目を上げて僕を見る。　勇気を振り絞って僕は由紀にこういった。
「俺、またこの店来ていい？」勇気を振り絞った割にはたいしたことがないことであった。少し自分が情けなく思えた。また気の利いたこともいえないで馬鹿だねー僕、なんておもっていると
「そりゃ、店にきてくれたら売り上げが上がるから私は全然かまわないわよ。」
そして、初めて見せた小さな笑顔。

その笑顔が忘れられない。

春の急な雨に降られた。毎日空を見ているはずなのに皮肉なもので、今日は傘をもっていなかったので濡れながら家まで必死に帰った。

雨の日は家で、ぼーっとするのが好きだった、僕と由紀は。なんの意識もなくCDをかけて、無意識にとった本を読んでみる。

またか。またこの本読んでしまった。由紀に借りたままのこの本。なんとなく返しそびれてしまっていまだに本棚においてある本。僕の思い出もこんな風にかざれればいいのに。

そこにおいてあるだけで、気が向いたら見る。そうすればふいに思い出して、切なくなったりすることもないのに。

ピーンポーン

突然のチャイム音にびっくりして、本を適当なところにおいてドアをあけてみると大紀がびしょ濡れになって立っていた。

「すまん、突然雨に降られたもんだから傘持ってなくて。しばらく避難しててもいい？」と、悲惨になっている大紀が言った。

「いいよ、とりあえず入りなよ」

「あと、悪いんだけどさ・・・」と決まりの悪そうな顔をして、

「あいつらも避難させてもらっていい？」と外側を指差した。そちら側を見るとなるほど、同じくびしょ濡れのクラスの女の子2人がたっていた。

断るわけにもいかないじゃないか、とつぶやきながら部屋に入れることにした。

ようするに、この仲がいい3人は遊んでいる途中雨に降られて、どうしようもなくなったので大紀が僕のところでしばらく避難しようと言い出したらしい。

「お前よー、俺の部屋どう思っているわけよ？」

「まぁまぁ、亮次君そんなこと言わないでよ。この子達が風邪ひいたら悪いという俺の気遣いなわけよ！男なら当然でしょう。」

「まぁ確かに風邪ひいたらますいだろうけどよぉ」

「あのー、ほんとにごめんなさいね。」割り込んで女の子が謝ってきた。
「いや、大丈夫だよ！えーっと・・・」
「恭子でいいよ。亮次君でいいよね？いつも大紀がそう呼んでるから。大紀はなにかにつけて君のことを話しているからね。」
「変なこと言ってなかった？」
「そんなことないよ。あー、あの子も真帆でいいから」と、も一人の女の子を指差した。
「もうちょっとしたらコーヒーできるからちょっと待っててよ、せまい部屋だけど。」と、なんとか落ち着かせる。
「ねぇ、亮次君たくさんCDあるけどなんか借りていってもいい？」真帆さんが言い始めた。
「あぁ、いいよ。」僕はポットのお湯が沸騰したのを見て急いでコーヒーの準備をし始めた。
視界の外れで、真帆さんが本を手にとっているのを見て、
「あの！」
全員が、大紀までが驚いて僕のほうを見た。僕が思っていたよりすごく大きい声がでていたらしい。
「ごめん真帆さん、それ読みかけなんだ。」と本を指差した。
「そっかごめんごめん。つーか私も真帆でいいよ。」といってくれた。
「うん、ごめんね。とりあえずコーヒー入れたから。」と全員にコーヒーを出した。大紀はそれでもびっくりしたらしい。僕をじっと見ながらコーヒーを飲み始めた。
僕はごまかすように、由紀の本を片して、CDをかけなおした。

僕はなんとか大丈夫だったみたいだが、大紀達は風邪をひいてしまったみたいだ。
こんなつまらない話なんだけど、それでも由紀にちょっとだけでいいから電話したくなってしまった。

3～サビ～

由紀はあの町でいきていくのには、僕のすべてだった。
高校生のないお金を絞って由紀の働く喫茶店によく行くようになって、僕は彼女との秘密を持ったような気持ちになった。彼女からたくさん本やCDを貸したり借りるようになって、いろんなことを話していくようになって、ますます彼女にひかれていった。いつからか苗字じゃなくて名前で呼び合うようになった。学校でも仲良く話すようになった。
付き合っていたわけではない。そのような関係と呼ぶべきなのか、そうなっていいのかとかいろいろ考えたくせに、そんなことになるのがおっかなくて。でもそれでも特別な関係だった。
しかし由紀とは決定的な違いがあった。由紀がいても僕はさらに退屈を紛らわしたくて、もっと刺激が欲しくて東京の大学に行くことを選んだ。由紀は地元に残ることを選んだ。

「なぁ、どうして由紀は東京に行こうとか思わないの？みんな大体東京に行くのにさ。」
いつものように、由紀の店でコーヒーを飲みながら聞いてみた。
「みんながいくからっていくわけじゃないでしょ。それにこっちの大学だって勉強できる　　し、店だってあるし。なら亮次はどうして東京行くの？」
「だって、向こうのほうがいろいろあるし、やりたいことだってたくさんあるし。」
作った言い訳。そうしたいのは事実なんだけど。それでもやっぱり退屈を紛らわしたいという単純なことだけだった。でもそう言うのが怖くて、単純な理由だと由紀に思われるのがいやでそう答えた。
「だから私はこっちに残るわよ。」
「そっか、いや由紀って頭いいじゃん。俺よく教えてもらうし。」

「だけどそれだけで、なんとなく東京には行く気にはなれないわ。」
僕は由紀と東京に行きたい。喉まででかかった言葉。でもやっぱり僕には言えなかった。

とんとん拍子で試験が近づき、由紀の店にあまり顔を出せなくなって、連絡が途絶え始めて。大学が決まって住む所も決まって。そうして、旅たつ日はきた。

駅のホームで黙って電車を待っていた。由紀とは結局あんまり顔をあわせなかったな。それだけが心残りだ。もうすぐ電車が来る。
バイバイ、小さくつぶやいて荷物を持とうとした。
「かっこつけて去ろうとしちゃってもそれは痛いよ亮次君」
「ずいぶんタイミングいいんだね、由紀は」
反射的に答えたけど、僕はすごく驚いたしすごくうれしかった。
「そうそう、由紀に借りたこの本・・・」
「いいよ、その本。持っていきなよ、気に入ってるんでしょ」
ありがとう、そう言って本を荷物に入れた。
発車のベルが鳴り始めた。僕は荷物を持ち直して電車に乗った。
「じゃ、今度こそだな。まぁいってきますよ」
ふりむいて気づいたら、由紀の顔が目の前に。っていうかほんと鼻の先にあった。
え？なにが起こったの？？なにもわからぬままドアは、ものすごくスローに閉まっていった気がした。
由紀は僕に、キスをした？？
ただただ、びっくりした僕にドア越しに手を振ってなにかをつぶやいた。おそらく「じゃあね」と。
僕はそうして東京に出てきた。

東京の生活は新鮮だった。とにかくいろんなところが新しい。高いビル、たくさんの人、もの。大学での生活も刺激的で楽しかった。退屈がまぎれていく。

だけど、それも長くは続かなかった。少し慣れてしまえばただの多い人の群れ。高い建物。

それに、なにも感動も覚えなくなった時。僕は、途方にくれた。

こんな時に由紀がいてくれれば、どのくらい楽しいだろう。でもそんな弱音いえるわけがない。僕は強気に言って東京に出てきたのだから・・・

由紀とはそれでも、たまに連絡をとっていた。今日行ったところ、会った人、買ったもの。東京に出てきて失敗じゃなかったと勝手に証明するかのように話した。だけど、由紀には全然その思いは通じなかった。僕の感動や喜びを、由紀にもわかってほしかったのに。

「私は君と一緒にいるわけじゃないんだから、わかるわけないでしょ！」

当たり前のこと。それでも由紀なら、由紀ならわかってくれるかもという期待から少しずつほころびが見えはじめた。連絡が途切れそうになっていった。

由紀がいないことが。同じものを見て共感しあう母親と赤ん坊のようにできないから。由紀とうまく話せないことが。少しずつ、由紀と距離が離れていってしまった。

離れていけばいくほど、由紀が素敵だったことが忘れてしまっていく。本当につらかったのだけれど。どうしようもできない事実と日々の生活から、それを考えることを忘れかけていっている。

だから時々空を見上げて、思い起こしてみたり。ホームにいるときに、ふと瞬間に思い出したりする。

僕は、笑って由紀に会えることができるのだろうか・・・

4～再びAメロ～

いろんなことを考えても結局大学生なので授業に出たり、課題をしてみたり、バイトをしたりとまた忙しい生活が舞い戻ってきていた。時の流れに身をまかせて、とにかく何も考えられないほど。

それを心のどこかで望んでいるのも事実。僕はまた由紀のことを考えるのを拒否していた。

思い出すと悲しくなるから。思い出すと寂しくなるから。

それでも、課題提出が近くなるとあせりがちな僕は、少し文句をつけながら終わらした。やっぱり課題が終わるとうれしいものだ。わがままな僕。

少しうかれながら家に帰った。今日は大紀と飲むのも悪くない。なんといったってめでたい日だ。いつものようにポストを見てから大紀に連絡してみようと思った。

ダイレクトメールの数々。宅配ピザのチラシ。電気代請求。

見慣れない封筒。いつもはそんなものが入っていない。一瞬なんのことだかわからなかったけれど、宛て先の字を見た瞬間にその特徴ある文字の書き主を思い出した。

由紀？急いで裏を見ると僕の予想通り由紀の名前が書いてあった。急いで部屋に入り、おそるおそる手紙を開いた。

『拝啓、亮次君

元気にしてますか？便りがないのは元気な証拠ともいいますが。とそんなこと言ったってしかたないよね。

実は先日、おじいちゃんが亡くなりました。だからあの喫茶店も閉店することにしました。少しずつ具合が悪くなっていたのは確かだったんだけど、それでもおじいちゃんが続けたいと言っていたので私も手伝っていました。けれど、その主人を失った店を続ける自信もないので閉めることにしました。

それに私はこの店に罪悪感を覚えています。本当は私も東京に行きたかったんです。だから、亮次に内緒で調べたりもしました。だけど、おじいちゃんが少しずつ具合が悪くなっていること、この喫茶店に対する思いから、私はこっちに残ることに決めたのです。

こっちでも勉強できると言ったことは嘘ではありません。それなりに充実しています。けれど、心のどこかで、この店がなかったらと考えた日もありました。亮次にきつくなってしまったのも、東京に行きたかったのにという気持ちがあったのも事実です。

こんなこと手紙で書いてどうなるものではないということはわかっています。メールで送ったほうが早いとも考えました。だけど、こうして手紙で書くのが今、私ができる一番のことだと思いました。

わがままでごめんなさい。

ＰＳ　そういえば今年の夏は暑そうですか？亮次は季節に敏感だったよね。』

そう書いて、最後の方に閉店する日が書いてあった。由紀らしい。

僕は瞬間的に携帯をとって、由紀の番号を出した。けれど押せなかった。少し由紀が腹立たしかった。けれど、それ以上になつかしさがこみ上げてきた。

僕は外に出て走り出した。わけもなく。ただ飲み物が飲みたくなった。

由紀、今年の夏は暑くなさそうだよ。

「珍しいな、お前がそこまで酔うなんて。」遠くから大紀の声が聞こえる。

そんなことは今どうでもいいこと。とにかく現実から逃げるかのように飲んでいる。

あの日が近づいてきた。もうすぐあの店が閉まる。由紀に近づけたあの店、由紀と話した店、僕の思い出がつまっている店。

どうすればいいのだろう。なにかをしないといけない気持ちと、どうしようもない気持ちの間に立っている。どっちを見ても先が見えなくて、でもどちらかを決めないといけない気持ちになって。結局酒に逃げてしまっている。これが一番恥ずかしいことかもしれない。酒にのまれて、トイレにこもっていろんなものを吐き出して・・・

何分くらいトイレにいたのか定かでないけど、出てきたら大紀が心配そうな顔を向ける。

「大丈夫か？」「あぁ、なんとか生きているみたいだよ。」

幸い今はボクの部屋で飲んでいる。だから心配することも少ない。

「たまには世話するのも悪くないな。」

「いつも僕がしていることだろ。」寝かされながら話をする。この瞬間が一番気持ちいい。

「亮次、今日俺もう帰れないから泊まっていくよ。」

「あぁ、すまないね。布団の場所わかってるでしょ？俺、先に寝るかもしれないけど勝手にしててていいからさ。」

「ありがとう。」そういいながらも大紀がじっとしているのがわかった。いつもと違う雰囲気だ。

「どうしたの、大紀？」

「こっちが聞きたいよ。何かあったのか？普段じゃ考えられないぞ。」

空白の間。かけていたＢＧＭがやたらと響いて聞こえる。

「詮索するのは好きじゃないけど、ここ何日かお前どこかおかしいよ。」

やっぱり、大紀には気づかれてたらしい。やっぱりいつもと同じようには振舞えなかったんだな。

「とってもくだらないことなんだ。僕にもわかっているんだ、それでも立ち止まらずにはいられないんだよ。」

ＢＧＭは鳴り止まない。大紀が黙ってたたずんでいる。ついにきたのかもしれない。

なにかにとりつかれたかのように僕は由紀とのことについて話し始めた。由紀との出会い、駅での出来事、東京にきてからのすれ違い。

大体の事情を話したとき、僕はすっきりした気持ちともやもやした気持ちの両方が存在していた。なにかを話してすっきりするなんて嘘なんだ。話したところの空間はやっぱり不安で埋められるのかもしれない。

「僕は、由紀じゃないのに。僕が望んで東京に出てきたのに、一人になってしまった気持ちになって。それがわかってきていても、僕には・・・。」

大紀はまだ静かに聞いていてくれた。僕は由紀の手紙をとって大紀に渡した。

「由紀からの手紙。彼女は僕に送ってくれた。やっぱり彼女はすごく強い人なんだよ。」

大紀はそれを読んだ。少しずつ日が差してきていた。

ついに、店が閉まる日が来たのだ。

「俺には、正しいことなんかいえない。」

大紀がついに口を開いた。僕は全神経を集中させていた。

「正しいことなんて、こんなことには存在しないと思うんだ。俺は偉そうなことなんていえない。自分にだって心残りなことがたくさんあるんだ。」

そういって、大紀は横になった。

「だけど俺にいえるのは、由紀さんはお前が言うよりも強くないのかもしれないよ。手紙を出して書くことは勇気がいることだけど、だからって彼女が強いことにはならないと思うんだ。それに・・・」

「それに？」

「少なくともお前がそうしている場合じゃないってことはわかるよ。」

すごく胸が痛かった。改めて、誰かにそういわれるとすごく痛い

な。

「少し、眠っていいかな？気分が悪いんだ」　僕は聞いてみた。

「お前、今俺がいったこと聞いて・・・」

「すごい顔のまま会いにいけないでしょ？」

大紀は驚いたみたいだった。

「それはそうだな。昼になったら起こしてやるよ。」

「ありがとう、あとごめん少し金かりていい？」

「あぁ、今度飲み会で返してくれよ。」

大紀に起こしてもらったのは確かに昼過ぎだった。こんな時には律儀なやつだ。

「じゃあ、行ってくるよ。」

「なぁ、亮次！！」大紀が大声で呼び止めた。

「うまいことはいえないけどさ。東京にでてきてって言ったけどさ、結局は同じ日本なんだよ。西で降った雨は、いつか東にもくるのは確かなんだよ。」

「ありがとう。」　そう言って僕は外に出た。

改めて僕は空を見上げてみた。そういうことか・・・

区切られてたんじゃないんだ。区切ってたのは僕だったんだ・・・

～アウトロ～

帰ってきた。電車に揺られて長い時間かかったけど・・・僕はここに帰ってきた。すっかり暗くなっている。

なつかしいな。あんまり変わらないな。駅前の店も・・・

由紀と歩いた道、由紀と寄った店・・・すべての時間が止まっているように何も変わっていないように見える。

けれど、そうじゃないんだろう。僕らが歩いたあの道は今は高校生たちが歩いて帰っている。あれから、この街にだって時間は流れているんだ。由紀にも、僕と同じだけ時間が流れているんだ。なんで今更こんなこと考えているんだろう。やっぱり由紀に会うのがちょっぴりおっかないのかもしれないな。

あの店に由紀は本当にいるのかな？由紀と、うまく話せるのか・・・ずっと、電車の中で自問自答してきてた。まぁいいかって思える瞬間があっても、もしも会ってしまったらこれからすごくつらくなるのかもしれないって思いが締め付ける。

一歩一歩、踏みしめる。由紀がどのくらい素敵だったかを思い出してみる。この先に由紀はいるかな、由紀はいるかな。由紀と上手く話せるかな・・・

由紀の喫茶店の前にたった時、それまでのいろいろな感情が一気に駆け上がってきた。今さらここまできて引き返すのはいけないことだとはわかっているけれどそれでも不安だな・・・結局、何が自分をそこまで不安にさせるかは全然わからないまま立ってしまったな。その答えはでるかな・・・

とにかく僕は静かにドアを開けた。初めてこの店に来たときと同じように・・・

ここはまるで時間が止まったままだった。古いポスター、古い曲・・・そして・・・

「いらっしゃいませ。」
あの時と同じ声。今までいろいろ積もっていたものが一気に吹っ飛んだ気がした。
由紀・・・少しやせたのかな？髪伸びたのかな？？似合っていると思える。
「亮次・・・きてくれたんだ。」彼女はびっくりして僕を見ている。
「うん。手紙、見たからさ。」
「そうだよね、私が手紙出したんだよね。」言葉をそこで止めて、由紀はまた少し口を開いた。
「期待はしてたけど、きてくれないかもって思ってた。もしかしたら・・・。」
「ん？」
「手紙読まないかと思ってた。読んでくれたとしても書いたことを、怒ってもうだめかと思って・・・」
僕はびっくりして彼女を見返した。僕が知っている由紀はいつだって前向きで、どこか不思議で、いろんなことを客観的に考えられる子だと思っていた。まさか、そんな弱音を言うなんて思ってなかった。
（由紀さんはもしかしたら、そんなに強くないのかもしれない）
大紀の言葉を思い出した。そっか、そうだよな。こうしてお互いいるんだ。そんなところがあったっていいじゃないか。
僕はそれまで考えたことが馬鹿らしくなってきた。なにをいろいろ考えていたんだろう。
席について、もう一度考えた。僕らはここから始まったんだ。いや、正確にははじまってはいなかったのかもしれない。
だからもう1度、ここから始めればいいんだ。あの時のように・・・
・　笑顔で、少し恥ずかしながら頼む。
「コーヒー。ミルクたっぷりで。」

終わり

～アウトロ～（後書き）

初めて書いてみました。うまく伝えられなくてもどかしかったりしたのですが・・・それでも、この曲に対して思えた話を書けなのではないかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4129a/

東京

2010年10月10日17時45分発行